『敦煌寫本研究年報』第十六號（2022.03）45–60 頁

五月一日經『寶雨經』補正

——書寫次第の再検討*

Reoconsidering the Process of Copying the *Baoyu Jing* Commissioned by Empress Kōmyō

大西磨希子

はじめに

「五月一日經」とは、巻末に天平十二年（740）五月一日の發願文を有する光明皇后御願の一切經を指し、おおよそつぎの三期にわたって書寫された。

〔第一期〕天平五年（733）頃～同十二年（740）四月
〔第二期〕天平十三年（741）閏三月～同十四年（742）末
〔第三期〕天平十五年（743）五月～天平勝寶八歳（756）

一方、本稿で扱う『寶雨經』は、則天武后による統治下にあって、その正統性を裏付ける佛教經典として『大雲經疏』とあわせ重視されたもので、達摩流支（菩提流志）[1]譯になる十卷本である。この十卷のうち、五月一日經書寫事業では第二期にあたる天平十四年に、當時日本に傳來していた卷二、卷五、卷八、卷九、卷十の五卷のみが書寫された[2]。

*本研究は、平成 30 年度佛教大学教育職員研修による成果の一部であり、JSPS 科研費 19K00183 の助成を受けたものである。

[1]達摩流支は、天后すなわち則天武后により名を菩提流志に改めた。これについて、後掲注 3 の舊稿では「菩提流支」と書き誤っていた。ここに訂正し、ご指摘くださった孫英剛氏に感謝申し上げたい。

[2]殘る卷一、卷三、卷四、卷六、卷七の五卷は、のちに天平勝寶六年（754）の入唐廻使が請來した。すなわち、天平寶字五年（761）三月廿二日「奉寫一切經所解」（小杉本雜 4）には、「寶雨經五卷」の下に「第一三四六七」との注記があり、さらに末尾に「以前經論、並是元來无本、去天平勝寶六年入唐廻使所請來」とある（『大日本古文書』編年四、497、499 頁）。

筆者は以前、この五月一日經『寶雨經』經文に則天文字が使用されていることに着目し、底本の書寫時期やその傳播などの問題を論じたことがある[3]。すなわち、五月一日經『寶雨經』經文に記された則天文字は、いずれも延載元年（694）十月以前に制定されたものに限られている。したがって、底本が書寫されたのは同經の漢譯――長壽二年 (693) 九月――からわずか一年以内のことと判明する。しかも、敦煌とトルファンから發見された『寶雨經』寫本 S.2278（卷九）と MIK III-113（卷二）も、則天文字の使用狀況が五月一日經本と共通していることから、同經は譯出後一年以内に大量に書寫され、武周王朝の統治下に廣く傳えられたことが確認できる。そして五月一日經本は、その傳播の過程で、一部にあたる五卷のみが日本に齎され、それらを底本として書寫されたもの、ということになる。

舊稿ではさらに、正倉院文書に殘る五月一日經書寫に關する記録をもとに、『寶雨經』の書寫を擔當した經生や校生および書寫次第について考察を加えた[4]。しかし、後に舊稿を見直すなかで書寫次第に關する考察に誤りが含まれていることに氣づいた。そこで小論では、前稿の誤りを訂正することを目的とし、改めて書寫から完成にいたるまでの流れを再檢討するとともに、その後に得られた知見を加え若干の補足を行いたい。

一、『寶雨經』書寫に關する正倉院文書

五月一日經『寶雨經』の書寫に直接關わる史料として、「寫一切經經師等手實案帳」（續々修第 1 帙第 2 卷）[5]と「裝潢本經充帳」（續々修第 28 帙第 3 卷）[6]の二點が正倉院文書に殘されている。

（1）「寫一切經經師等手實案帳」

「寫一切經經師等手實案帳」は、經生らの業務申告書である手實を中心に計 73 紙を貼り繼いだもので、つぎのような構成になる[7]。

[3]拙稿「聖語藏の『寶雨經』――則天文字の一資料」（『敦煌寫本研究年報』第 8 號、2014 年 3 月）、同「五月一日經『寶雨經』餘滴」（『敦煌寫本研究年報』第 9 號、2015 年 3 月）。これらは拙著『唐代佛教美術史論攷――佛教文化の傳播と日唐交流』（法藏館、2017 年）第三部第一章「則天文字の日本移入――聖語藏本『寶雨經』を手がかりに――」、第三部第二章「五月一日經『寶雨經』」に、一部加筆修正のうえ再録。

[4]前掲注 3 拙稿「五月一日經『寶雨經』餘滴」、前掲注 3 拙著第三部第二章。

[5]『大日本古文書』編年八、74–107 頁。なお『大日本古文書』はこの表題に誤植があったが、舊稿では不注意にも正誤表を見落としていた。ここに訂正しておきたい。

[6]『大日本古文書』編年八、110–126 頁。

[7]皆川完一「光明皇后願經五月一日經の書寫について」（『日本古代史論集』上、吉川弘文館、1962 年）、石上英一「集合文書と文書集合」（皆川完一編『古代中世史料學研究』上、吉川弘文館、1998

① 總首題（第 1 紙）「自天平十四年六月一日盡十一月卅日寫奉　一切經幷疏」
② 六〜十一月 經生手實（第 2〜第 66 紙）
六〜七月: 首部總計（第 2 紙）＋經生手實（第 3〜第 8 紙）
八月: 首部總計（第 9 紙）＋經生手實（第 10〜第 29 紙）
九月: 首部總計（第 30 紙）＋經生手實（第 31〜第 48 紙）
十〜十一月: 首部總計（第 49 紙）＋經生手實、用紙未奉人注文（第 50〜第 66 紙）
③ 六〜十一月 裝潢充經注文（第 67 紙）
④ 六〜十一月 校生手實解（第 68〜第 72 紙）
⑤ 裝潢所解（第 73 紙）

『寶雨經』は第 46 紙の九月建部廣足手實[8]（圖 1）に現れる。すなわち、天平十四年九月に經生の建部廣足が書寫した經論の筆頭に『寶雨經』五卷が記され、各卷に用紙の枚數が注記されている。したがって、『寶雨經』が書寫されたのは天平十四年九月中であったことが、まず確認できる。

この九月建部廣足手實には、末尾の日付の下に「讀 道主　勘人成」との別筆がある。そのうち「勘人成」は、辛國（韓國）人成が布施計算の根據となる報告内容に誤りがないかどうか點檢したことを示すものである。一方、それと同筆で記された「讀 道主」が校生の田邊道主を指すことは、舊稿でふれたとおりである。前稿では、この「讀某」とある追筆を、粗忽にも當該手實に記載された經論の校正擔當者名を記したものと考え、つぎのように推論した。すなわち、この「寫一切經經師等手實案帳」第 72 紙の田邊道主手實解[9]に、

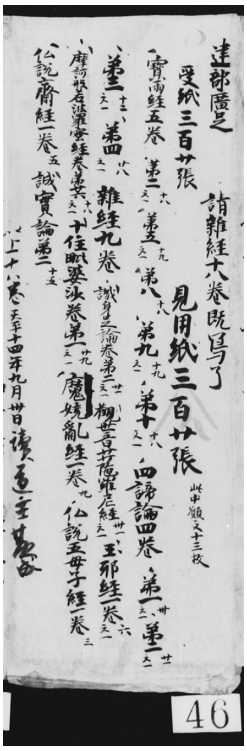

圖 1: 九月建部廣足手實

田邊道主　　校經紙事
合校經九十七卷 校紙一千八百八
右、始七[10]月廿八日至十月廿八日、所校一切顯注如前、以申
十月廿八日「勘人成」

とあり、田邊道主が校正を行なった期間は天平十四年七月二十八日から同年十月二十八日までであったと記されていることから、天平十四年十月二十八日を『寶

年）を參照。
[8]續々修第 1 帙第 2 卷。『大日本古文書』編年八、92–93 頁。
[9]續々修第 1 帙第 2 卷。『大日本古文書』編年八、106 頁。
[10]「七」字を『大日本古文書』は「五」に作るが、影印により改めた。

雨經』五卷の校正時期の下限とみなしたのであった。

しかし、「讀某」との異筆書込は、手實提出後、布施支給に至るまでの事務處理過程において内容をチェックするために手實が「讀」み上げられたことを示すものであるとの指摘が、大平聰氏によってなされている[11]。そこで、舊稿の推論を問い直してみると、假に「讀某」が手實記載の經論の校正擔當者を記したものであるとするならば、「寫一切經經師等手實案帳」の經生手實に記された用紙數を、そこに記された「讀某」の校生ごとに集計すれば、校生手實に記された校正紙數と合致するはずである。ところが、それらは實際には一致しないことが分かった[12]。ただし、大平氏も指摘しておられるように、「讀某」のなかには「讀勘人成」や「勘人成並讀」との記載もあることから、手實の内容が「讀」み上げられるのを聞きながら書寫された經典類を「勘」檢したとは考えにくく、「讀某」の具體的行爲については不明な點が殘る。とはいえ、少なくとも「讀某」が校正擔當者を記したものでないことは明らかである。また、『寶雨經』五卷の校正擔當者が誰であったかまでは特定できないということにもなる。舊稿の誤りを正したい。

(2)「裝潢本經充帳」

つぎに、「裝潢本經充帳」をみると、まず第1紙[13]（圖2）に、

天平十四年七月廿四禪院本經充（日脱カ）

（中略）

寶雨經五卷 充建部廣足用九十二枚 注涅槃經第七帙 第十第四卷充古神德用紙六十三

（後略）

---

[11]大平聰「「三人」の寫經生」（『桐朋學園大學研究紀要』第13集、1987年12月）注22。なお、大平氏は「勘某」と「讀某」の追筆を「相互にも異筆のようで、それぞれ「勘」・「讀」の行爲者によって自署されたと見てまず間違いないだろう」としておられるが、「寫一切經經師等手實案帳」の影印を見る限り異筆とはみなしがたく、同筆と思われる。ご指教を賜りたい。

[12]經生手實に記された用紙數を、そこに記された「讀某」の校生ごとに集計してみた結果は、第68～第72紙の校生手實に記された校正紙數よりも明らかに少なかった。ただ、集計結果を表にして本稿中に掲出しなかったのは、以下の事情による。すなわち、「讀某」の追筆のなかには辛國人成が「勘」と「讀」を擔當したと記すもの（第7紙六・七月雀部島足手實「勘人成並讀」、第26紙八月建部廣足手實「讀勘人成」、第59紙十・十一月山部花萬呂手實「讀勘人成」）や、「讀川河當成」とあって擔當した校生が特定しがたいもの（第31紙九月角惠末呂手實、第32～第33紙九月丸部石敷手實、第34～第35紙九月漢淨萬呂手實、第37～第38紙九月葛野安麻呂手實、第43紙九月阿刀息人手實）、またそもそも「讀某」の追筆がないもの（第39紙九月大石廣麿手實、第40紙九月山部花萬呂手實、第41紙九月調雄蘇手實、第48紙十月韓國人成手實、第50紙十・十一月角惠萬呂手實、第62紙十一月韓國人成手實）があり、正確に合計を出すことができないためである。

[13]續々修第1帙第2卷。『大日本古文書』編年八、111–112頁。

とあり、『寶雨經』五巻は天平十四年七月二十四日に、元興寺禪院から借用されたものであったことが分かる。

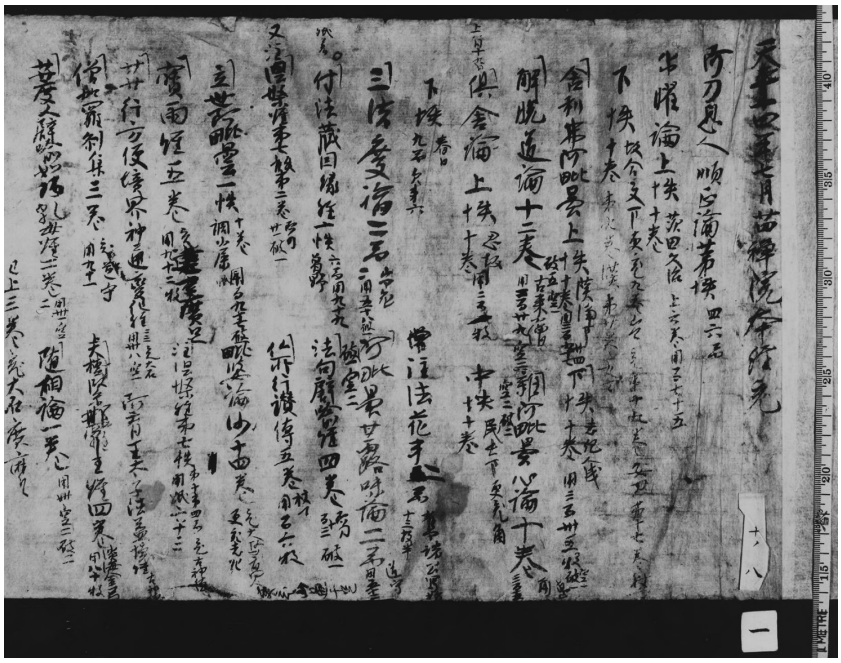

圖 2：装潢本經充帳第 1 紙

また、ここからは各經論がいつ、どの装潢生によって卷子に仕立てられたのかを考える手がかりが得られる。第 8 紙（圖 3）[14]には、

以九月廿日充

○十月二日題了

巽集百喩經十卷 用百七十八 破一空一

題了

安樂集二卷用六十四破一

題

寶雨經五卷用九十二

三日上

大樹緊那羅經王經四卷 用八十

（後略）

三日上

~~十月二日題了~~

无盡意井經三卷 用五十八

○三日上日

三彌底論三卷用冊二

○題了

僧羅刹集經三卷用九十一

○題了

阿毘曇甘露味論二卷 用五十二空二 破一

[14]續々修第 1 帙第 2 卷。『大日本古文書』編年八、118–119 頁。

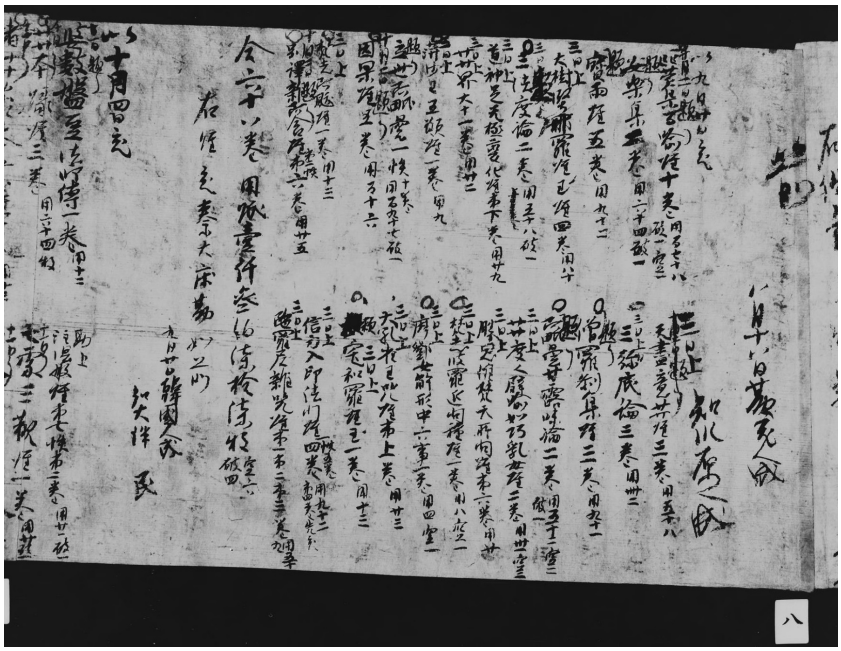

圖 3：裝潢本經充帳第 8 紙

とあり、天平十四年九月二十日に『寶雨經』五巻を擔當することになった裝潢生は秦大床であったことが分かる。

さらに、「寶雨經五巻用九十二」とある經題の右肩には印が付けられ（圖 3 参照）、「題」と書き加えられている。また、その前後をみると、第 8 紙冒頭の『巽集百喩經』十巻の右肩には「十月二日題了」、つぎの『无盡意菩薩經』三巻には「十月二日題了」と記し、それに打ち消し線を引いたうえで右上に「三日上」とある。その他も單に「題了」と記すほかは「十月二日題了」「三日題了」「三日上」とある。ここにいう題とは外題のことであろうから、巻子に仕立てられたのは當然それ以前と考えられる。

したがって、『寶雨經』五巻が裝潢生の秦大床の手によって巻子に仕立てられたのは、外題が付された十月二日乃至三日以前とみることができよう。

二、『寶雨經』の校正時期

（1）裝潢との前後關係

堀池春峰氏が書寫狀況を詳細に檢討された『瑜伽師地論』百巻によれば[15]。これらは五月一日經書寫事業の第一期に書寫されたもので、具體的な書寫期間は天平

[15]堀池春峰「光明皇后御願瑜伽師地論の書寫について」（『南都佛教』創刊號、1954 年。『南都佛教史の研究 上 東大寺篇』法藏館、1980 年に再録）。

十一年十月から同十二年二月ごろと推定できる。そのうち聖語藏に現存する八十巻のなかには、巻末端裏に經生や校生の識語が遺っているものがある[16]。例えば、巻一八（圖 4）には、

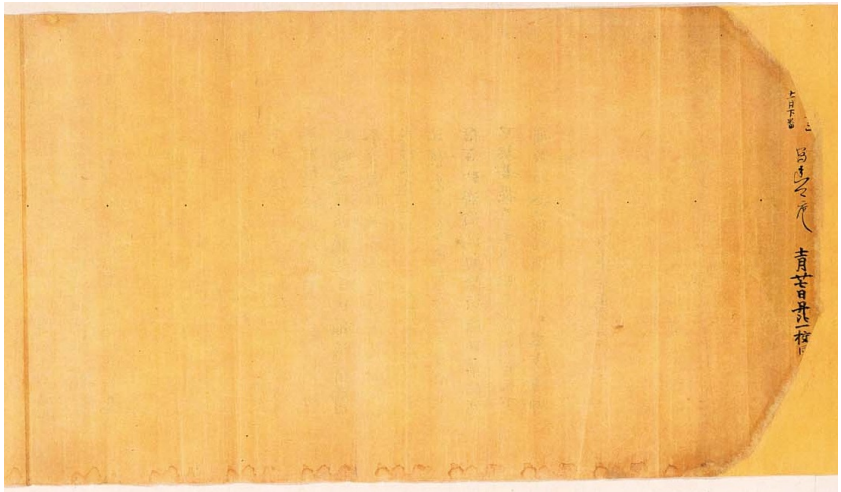

圖 4：聖語藏『瑜伽師地論』巻一八 巻末端裏

□三
十一月下番　寫建部廣足」「十一月廿七日丹比一校」「同□

とあり、十一月の下番、すなわち十一月後半に建部廣足が書寫し、十一月二十七日に丹比道足が初校を擔當したことが分かる。同じく巻二一には、

□空二 漢淨萬呂」「七月廿四日一校」□
「二勘赤誤寫」

とあり、經生の姓名は殘らないが漢淨萬呂が七月二十四日に初校を擔當し、高屋連赤麻呂が二校を行っており、巻七二には、

「丹比一校正」「二校土島正了□

とあり、丹比道足が初校を、土師眞木島が二校を行ったことが分かる。これらの

[16]堀池氏は、前掲注 15 論文のなかで、これら巻末端裏に殘された識語について、つぎのように指摘している。「これらの識語は殆ど經軸に巻込まれ、大豆糊で密着している。紙端が楕圓形に切截されているために、全貌を窺うことは出來ないけれども、書寫・校合に當って寫經生が巻末紙背端に用紙數及び自己の姓名等を明記したこと、さらにそれが校生の手に渡って原本と校合せられ、校合の月日と姓名を記し、誤字があれば抽出したこと、校合は二校に及んだことが知られる。他の經巻の例によれば寫經生が經論疏の題名を上部に記しているものが僅ながら現存している點より、恐らく題名がこれら識語の上方にあったと想定せられる。かかる事實は、この書寫校合に從事した人々の責任を明示する一證であるとともに、給料支給の基準ともなったので、恐らく五月一日經の全部がこのような方法によったものであろう。しかし不幸にしてその大半は裝潢の際、切捨てられて巻子本に仕立てられる運命をたどったのである」。

識語の上下や右側が缺損するのは、圖 4 の失われた部分の形狀から明らかなように、卷子に仕立てる際に切り落とされたためである。

したがって、『寶雨經』五卷の校正時期の下限はひとまず、題が付された十月二日乃至三日に置くことができよう。

（2）一日の校正枚數

では、天平十四年九月中に書寫された『寶雨經』五卷は、十月二日乃至三日より以前の、どの時點で校正されたのであろうか。これを考えるには、五月一日經の寫經事業における校生の一日の作業量が參考になろう。

「寫經校帳」（續々修第 26 帙第 1 卷）[17]には、天平十一年七月十三日から十月二十九日までの間、各校生が何月何日にどれだけの卷數と枚數の校正をこなしたかが記録されており、當時の具體的な校正作業量を知るうえで貴重である（末尾 表 1）。それによれば、少ないものでは一日わずか 12 枚（八月十三日土師宅良）であるのに對し、一日に 164 枚（十月二十七日土師眞木島）もの校正をこなした場合もあり、校正對象の違いや校生の習熟度の差などによって、分量にかなりばらつきがあったことが分かる。しかし、一日あたりの平均でみれば、土師宅良は約 43 枚、阿刀酒主は 70 枚、廣瀨伊賀は約 80 枚、辛國人成は約 69 枚、海秋麻呂は約 59 枚、土師眞木島は約 99 枚、鴨庭麻呂は約 89 枚、大宅諸上は約 99 枚、凡國足は約 60 枚で、おおよそ一日あたりの校正枚數は 40 枚強から 100 枚弱となる[18]。すると、『寶雨經』五卷の用紙は 92 枚であるから、一回の校正に要した日數は一日から三日程度であったとみてよいであろう。

ただし、ここで考慮に加えなければならないのは、校正の回数である。先の『瑜伽師地論』端裏書では二校までなされていること、天平寶字八年（764）の御願大般若經の書寫事業でも二校が普通であったと指摘されていることから[19]、『寶雨經』が書寫された天平十四年六月一日から十一月三十日までの一切經書寫事業においても、二校までなされた可能性があるからである。そこで、同期間の實務内容に対する布施申請解である「金光明寺寫一切經所解」（續々修第 3 帙第 2 卷）[20]をみる

[17]『大日本古文書』編年七、381–386 頁。

[18]この「寫經校帳」（續々修第 26 帙第 1 卷）の端裏書（『大日本古文書』編年七、386–390 頁）には、さらに十一月から十二月の校正實績が録されているが、殘念ながら紙が破損した箇所があり、全貌を知ることができない。ただし、それらのうち十一月の全記録が殘る凡國足と土師眞木島の例を見れば、前者は一日平均約 76 枚、後者は約 72 枚となり、やはり一日平均 40 枚強から 100 枚弱という範圍の中に收まる。

[19]榮原永遠男「天平寶字八年における御願大般若經の書寫——藤原仲麻呂の亂と關連して——」（龜田隆之先生還暦記念會編『律令制社會の成立と展開』吉川弘文館、1989 年）。

[20]『大日本古文書』編年八、155–159 頁。

と、書寫された用紙は 7677 枚であるのに對し、校正紙數はその約 1.5 倍の 12000 枚にしかなっておらず、これだけをみると必ずしも二校を行ったわけではなかったように思われる。しかし、ここでの校生ごとの校正紙數は、田邊當成は 2000 枚、大伴吉人は 3000 枚、田邊道主は 1000 枚、尾張少土は 2000 枚、川原人成は 4000 枚とあり、校紙の實數をそのまま反映したものではない、千枚單位での概數となっている。それに對し、「寫一切經經師等手實案帳」第 68〜第 72 紙の「校正手實解」[21]に記された實數は、記載順に田邊當成は 2295 枚、大伴吉人は 3422 枚、川原人成は 4748 枚、田邊道主は 1880 枚[22]、尾張少土は 2351 枚が報告されており、これら實際の校正紙數は總計 14696 枚となる（表 2）。したがって、この時も基本的に二校を行っていたとみて間違いないであろう。ただ、これら五人の校生のうち、誰が『寶雨經』の校正を擔當したのかについては、知るすべがなく特定できない。

校生	手實に記す實際の校正枚數（「校生手實解」）	布施計算の根據とされた校正紙數（「金光明寺寫一切經所解」）
田邊當成	2295	2000
大伴吉人	3422	3000
田邊道主	1880	1000
尾張少土	2351	2000
川原人成	4748	4000
計	14696	12000

表 2：布施申請解と手實の校正紙數

さらに、二回の校正を行なうのに要した期間については、一校と二校との間にどのくらいの日數を空けていたのかという点も考慮しなければなるまい。これについては、つぎの例が一つの基準を示すのではないかと思われる。すなわち、五月一日經『瑜伽師地論』巻六九端裏には、

□先受了
□廿二枚破二 寫錦織君麻呂」「十一月廿日□
「廿六日大宅二□

[21]『大日本古文書』編年八、104–106 頁。なお、これら校生の手實に記された布施計算は、當然のことながら「金光明寺寫一切經所解」に記されたものと一致しており、田邊當成と尾張少土は「二千枚料」として四百文、大伴吉人は「三千枚料」の六百文、川原人成は「四千枚料」の八百文、田邊道主は「一千枚料」の二百文、との追筆がある。

[22]田邊道主の手實には「校紙一千八百八」とあるが（『大日本古文書』編年八、106 頁）、「田邊道主校經解」（續々修第 7 帙第 4 巻裏書、『大日本古文書』編年八、130–131 頁）には「一切經卷數惣玖拾漆卷」とある下に「用紙壹仟捌佰捌拾張」とあり、手實の記載は最後の「十」を省略したものであることが分かる。

とあり、十一月二十日に初校、同月二十六日に二校がなされたとみられる。また、先述したように同論の巻一八は、十一月後半に建部廣足が書寫し、同月二十七日には丹比道足が初校をしていた。したがって、書寫から一校さらに二校へという作業工程は、ほとんど日を隔てずに進められたと考えてよいであろう。

（3）書寫から裝潢への流れ

最後に、經生によって書寫された用紙が、裝潢生のもとに送られる流れ――この間に校生による校正が入るわけであるが――について考えてみたい。前掲「寫一切經經師等手實案帳」（續々修第1帙第2巻）第46紙の九月建部廣足手實には、『寶雨經』五巻を含む、つぎの書寫内容が報告されている。

建部廣足　　請雜經十八巻既寫了
　受紙三百廿張　　見用紙三百廿張 此中願文十三枚
寶雨經五巻、第二十八文一、第五十九文一、第八十八、第九十九文一、第十十八文一、四諦論四卷卅文一 、第一卅文一、第二廿一文一、第三十二文一、第四廿八文一、雜經九巻、識身足論卷第二廿一文一、觀世音井陀羅尼經卅一文一、玉耶經一卷六文一、摩訶般若波羅蜜經卷第廿六十八文一、十住毘婆沙卷第一廿九文一、魔嬈亂經一卷九、佛說五母子經一卷三 、佛說齋經一卷五 、誠（ママ）實論第二十五
「以上十八巻」天平十四年九月卅日「讀 道主　勘人成」

ここには建部廣足が天平十四年九月中に書寫した經論が記されている。一方、同じく前掲の「裝潢本經充帳」（續々修第28帙第3巻）をみると、これら一つの手實に記された經論がそのまとまりのまま裝潢に回されたわけではなかったことが分かる（表3）。すなわち、この九月の建部廣足手實のうち、九月二十日に裝潢生の秦大床に充當されたのは、手實の最初に記された『寶雨經』のみであり（第8紙）[23]、その他は十二月二日に同じ秦大床に充當されている（第10～第12紙）[24]。そこから、つぎのようなことが讀み取れる。すなわち、手實に記された經論が一括して裝潢生のもとに送られたわけではなく、早く書寫されたものは先につぎの工程に回される場合のあったこと、そして九月の建部の場合は『寶雨經』五巻から書寫に取り掛かり、それらを他の經論より先に裝潢に回したことが分かる。さらにいえば、手實における記載順は、ある程度、書寫の順序を反映している可能性も考えられよう。

[23]『大日本古文書』編年八、118–119頁。

[24]『大日本古文書』編年八、122–124頁。なお、『成實論』第二巻十五紙については「裝潢本經充帳」にいつ裝潢に充當されたかの記載がない。これは第2紙「誠（成カ）實論十六巻建部紙第二巻用」（『大日本古文書』編年八、113頁）とある右肩に「未寫欠」とあることから、書寫されなかったためではないかと思われる。

經典名（建部の手實における記載順）	裝潢
『寶雨經』五卷（卷二、卷五、卷八、卷九、卷十）	9 月 20 日充當、10 月 2 日乃至 3 日題
『四諦論』四卷（第一、第二、第三、第四）	12 月 2 日充當、12 月 11 日上
『識身足論』卷第二	
『觀世音井陀羅尼經』	
『玉耶經』一卷	
『摩訶般若波羅蜜經』卷第廿六	
『十住毘婆沙論』卷第一	
『魔嬈亂經』一卷	
『佛説五母子經』一卷	
『佛説齋經』一卷	
『成實論』第二	未寫ヵ

表 3：九月建部廣足手實にみえる經論の裝潢

建部の場合、九月の書寫紙數は計 320 枚であるから、一日平均十數枚を書寫していたことになる。すると、最初に着手した『寶雨經』五卷 92 枚は、九月十日頃までには書寫が完了していたと推測できる。そこから校生のもとに送られ、さらに九月二十日に裝潢生の秦大床のもとに送られるまでの十日間のうちに、二回の校正を經たということになる。これは先にみた、一回の校正にかかる日數――『寶雨經』五卷の場合であれば一日から三日――に照らしてみても穩當といえよう。その後、『寶雨經』五卷は、裝潢の秦大床の手によって卷子に仕立てられ、十月二日乃至三日に外題が付され、一連の書寫工程が完了したということになろう。

なお、天平十四年十二月十七日の「金光明寺寫一切經所解」（續々修第 3 帙第 2 卷）[25]によって、この時に題を付した題師は田邊橿實か我孫人主のいずれかであったことが知られる。

おわりに

以上、五月一日經の書寫事業における『寶雨經』五卷の書寫次第について、檢討した結果をまとめると、つぎのようになる（表 4）。

[25]『大日本古文書』編年八、159 頁。

月日	事項	書寫次第	典拠
7月24日	元興寺禪院の藏經を借用書寫擔當を建部廣足に決定		「裝潢本可充帳」（續々修第28帙第3卷）第1紙
9月1日		建部廣足が書寫を開始（約十日間）	「寫一切經經師等手實案帳」（續々修第1帙第2卷）第46紙「建部廣足手實」
9月10日		この頃から20日までの間に二回校正	
9月20日	裝潢擔當を秦大床に決定	この後、秦大床が卷子に仕立てる	「裝潢本經充帳」（續々修第28帙第3卷）第8紙
9月30日	建部廣足が9月の手實を提出、「勘 人成　讀 道主」と追筆	韓國人成が建部の手實を點檢	「寫一切經經師等手實案帳」（續々修第1帙第2卷）第46紙「建部廣足手實」
10月2日～3日	『寶雨經』に外題を付す	題師の田邊橿實か我孫人主が題を付す	「裝潢本經充帳」（續々修第28帙第3卷）第8紙 「金光明寺寫一切經所解」（續々修第3帙第2卷）

表4：五月一日經『寶雨經』五卷の書寫次第

まず、天平十四年七月二十四日に、元興寺禪院から『寶雨經』五卷が底本として借り出され、書寫擔當を經生の建部廣足に決定し、用紙92枚を充當した。建部は同年九月上旬に、充當された92枚をすべて使い切る形で書寫し終えた。續いて校生による二回の校正を經たのち、同月二十日に裝潢の秦大床のもとに送られた。秦の手により卷子に仕立てられた『寶雨經』五卷は、十月二日乃至三日に、田邊橿實か我孫人主のいずれかによって外題が付され、完成をみた。

五月一日經とその書寫に關連する正倉院文書だけでも厖大な點數が遺されており、先學による綿密な研究成果が蓄積されてきた。小論は、そのなかのわずか『寶雨經』五卷のみを對象とし、しかも舊稿での過ちを正すために、その書寫次第を再檢討したものにすぎない。不見識を愧じるばかりである。大方のご批正を仰ぎたい。

〔圖版出典〕

圖1　宮内廳ホームページ（https://shosoin.kunaicho.go.jp/documents/?id=0000011293&index=1）第46紙をトリミングして作成

圖2　宮内廳ホームページ（https://shosoin.kunaicho.go.jp/documents?id=0000011566&index=274）第1紙（部分）をトリミングして作成

圖3　宮内廳ホームページ（https://shosoin.kunaicho.go.jp/documents?id=0000011566&index=274）第8紙（部分）をトリミングして作成

圖4　『瑜伽師地論』巻一八　宮内廳正倉院事務所所藏『聖語藏經卷（CD-R）』第二期〈天平十二年御願經〉第2回配本（丸善、2002年）巻一八、第23紙裏をトリミングして作成

（作者は佛教大學佛教學部教授）

表 1：天平十一年「寫經校帳」にみえる校生の校正紙數

校生	月日	卷數	枚數
土師宅良	7 月 13 日	3	53
	7 月 14 日	1	24
	7 月 15 日	2	41
	7 月 16 日	1	38
	7 月 17 日	1	32
	7 月 18 日	3	64
	7 月 19 日	3	63
	7 月 20 日	1	19
	7 月 22 日	1	30
	7 月 23 日	1	28
	7 月 24 日	1	20
	7 月 25 日	2	49
	7 月 26 日	2	51
	7 月 27 日	3	78
	8 月 13 日	1	12
	9 月 1 日	1	25
	9 月 11 日	2	45
	9 月 12 日	2	54
	9 月 13 日	1	22
	9 月 14 日	1	23
	10 月 16 日	3	61
	10 月 17 日	2	52
	10 月 18 日	2	53
	10 月 19 日	4	81
	10 月 20 日	1	33
	10 月 21 日	3	54
	計 26 日		1105
	1 日平均		42.5

校生	月日	卷數	枚數
阿刀酒主	7 月 13 日	2	35
	7 月 14 日	4	91
	7 月 15 日	4	88
	7 月 16 日	3	66
	7 月 18 日	6	104
	7 月 19 日	3	53
	7 月 28 日	2	53
	計 7 日		490
	1 日平均		70

校生	月日	卷數	枚數
廣瀬伊賀	10 月 22 日	1	29
	10 月 23 日	1	23
	10 月 24 日	4	67
	10 月 25 日	5	83
	10 月 26 日	14	103
	10 月 27 日	6	108
	10 月 28 日	7	145
	計 7 日		558
	1 日平均		79.71

校生	月日	卷數	枚數
辛國人成	7 月 13 日	4	78
	7 月 14 日	1	44
	7 月 15 日	5	113
	7 月 16 日	3	68
	7 月 17 日	5	98
	7 月 18 日	5	90
	7 月 20 日	4	85
	7 月 21 日	4	89
	7 月 22 日	4	68
	7 月 23 日	3	67
	7 月 24 日	4	82
	7 月 25 日	3	68
	7 月 26 日	3	88
	7 月 27 日	3	75
	7 月 28 日	4	100
	7 月 29 日	2	39
	8 月 2 日	1	35
	8 月 3 日	1	20
	8 月 4 日	3	73
	8 月 5 日	3	65
	8 月 6 日	2	54
	8 月 7 日	2	34
	8 月 9 日	2	73
	8 月 10 日	2	43
	9 月 3 日	4	71
	9 月 5 日	3	99
	9 月 6 日	2	43
	計 27 日		1862
	1 日平均		68.96

校生	月日	卷數	枚數
海秋麻呂	7 月 13 日	2	43
	7 月 14 日	4	101
	7 月 16 日	2	52
	7 月 17 日	1	16
	7 月 18 日	3	67
	7 月 19 日	3	66
	7 月 20 日	2	56
	7 月 21 日	1	23
	8 月 2 日	1	31
	8 月 3 日	4	77
	8 月 4 日	3	62
	8 月 5 日	3	62
	8 月 6 日	2	60
	8 月 7 日	2	60
	9 月 2 日	2	41
	9 月 11 日	3	51
	9 月 12 日	3	81
	9 月 14 日	2	52
	9 月 15 日	2	51

	9 月 13 日	1	19
	9 月 16 日	2	47
	9 月 17 日	—	80
	9 月 18 日	6	113
	9 月 19 日	6	139
	9 月 20 日	1	24

計 25 日　1474
1 日平均　58.96

校生	月日	巻數	枚數
土師眞木島	9 月 1 日	4	77
	9 月 2 日	5	98
	9 月 3 日	1	19
	9 月 4 日	2	37
	9 月 5 日	8	95
	9 月 7 日	10	126
	9 月 8 日	7	91
	9 月 9 日	6	103
	9 月 10 日	6	131
	9 月 11 日	6	123
	9 月 12 日	3	73
	9 月 13 日	1	42
	9 月 15 日	6	139
	9 月 16 日	4	50
	9 月 18 日	4	102
	9 月 19 日	1	19
	9 月 20 日	2	47
	9 月 21 日	4	102
	9 月 22 日	4	94
	9 月 24 日	4	80
	9 月 25 日	4	119
	9 月 26 日	2	48
	9 月 27 日	3	80
	9 月 28 日	2	65
	9 月 30 日	2	90
	9 月 29 日	5	147
	10 月 2 日	3	90
	10 月 3 日	6	107
	10 月 4 日	3	101
	10 月 5 日	6	142
	10 月 6 日	6	152
	10 月 7 日	3	91
	10 月 9 日	—	140
	10 月 10 日	5	43
	10 月 23 日	8	154
	10 月 24 日	6	139
	10 月 25 日	9	144
	10 月 26 日	16	151
	10 月 27 日	8	164
	10 月 28 日	9	154

計 40 日　3969
1 日平均　99.23

校生	月日	巻數	枚數
鴨庭麻呂	7 月 13 日	4	80
	7 月 14 日	4	100
	7 月 15 日	4	106
	7 月 16 日	3	77
	7 月 18 日	4	109
	7 月 19 日	4	86
	7 月 20 日	4	77
	7 月 21 日	4	89
	7 月 22 日	5	116
	7 月 26 日	3	73
	7 月 27 日	4	87
	7 月 28 日	5	112
	7 月 29 日	3	63
	7 月 30 日	2	52
	8 月 7 日	2	61
	8 月 9 日	5	100
	8 月 11 日	3	54
	8 月 12 日	5	124
	8 月 13 日	3	63
	8 月 14 日	3	68
	8 月 17 日	3	76
	8 月 18 日	6	130
	8 月 19 日	6	139
	8 月 20 日	4	94
	8 月 21 日	5	110
	8 月 22 日	2	56

計 26 日　2302
1 日平均　88.54

校生	月日	巻數	枚數
大宅諸上	10 月 23 日	2	62
	10 月 24 日	4	98
	10 月 25 日	8	139
	10 月 28 日	7	114
	10 月 29 日	4	80

計 5 日　493
1 日平均　98.6

校生	月日	巻數	枚數
凡國足	7 月 21 日	4	98
	7 月 22 日	2	49
	7 月 23 日	2	49
	7 月 24 日	4	86
	7 月 25 日	2	33
	7 月 26 日	4	88
	7 月 27 日	1	21
	7 月 28 日	3	63
	7 月 29 日	4	73
	7 月 30 日	1	20
	8 月 2 日	1	31
	8 月 3 日	2	47

	8 月 4 日	1	20
	8 月 6 日	3	67
	8 月 7 日	2	45
	8 月 9 日	3	57
	8 月 12 日	3	66
	8 月 13 日	4	94
	8 月 16 日	3	75
	8 月 17 日	1	28
	8 月 23 日	3	71
	8 月 24 日	3	62
	8 月 25 日	2	47
	8 月 26 日	3	70
	8 月 27 日	1	23
	9 月 2 日	4	69
	9 月 4 日	3	53
	9 月 8 日	3	54
	9 月 9 日	5	82
	9 月 10 日	3	62
	9 月 11 日	2	38
	9 月 12 日	4	72
	9 月 13 日	2	44
	9 月 15 日	5	123
	9 月 20 日	4	97
	9 月 21 日	5	106
	9 月 22 日	7	96
	9 月 24 日	2	38
	9 月 25 日	4	96
	9 月 26 日	2	53
	9 月 27 日	1	15
	9 月 29 日	1	20
	計 42 日		2501
	1 日平均		59.55